

## 教育運動体としての育てる会

### ——会と指導者に求められるもの——

1968年に創設された育てる会。設立当時から、会の在り方として「教育運動を進める」という趣旨があります。またそれに賛同する保護者の方々、地方自治体関係者の皆様の理解と協力を得る中で、自然・生活体験活動を主軸に据えた教育活動を進めてきました。

そこで、今年の新春座談会は、在職30年を越える役員が、会の歴史を振り返りながら、これからの会の目指す方向性と後に続いてくれるであろう中堅若手職員への期待について語り合いました。

#### ● 出席者

代表理事 青木 厚志

理事 青木 高志

総務部長 武市 正幸

事業部長 秋山 雅光

#### 1. 育てる会の事業の変遷

**代表** 育てる会は、創設当初は任意団体として活動していたけれど、1972年に東京都認可の法人格を得て、1973年には文部省所管の財団法人として活動を進める中で、長野県の旧八坂村で我が国初の山村留学を1976年に創設して、教育界から大きな注目を集めた歴史があります。その後、長野県の売木村、N村、K村、新潟県M町からの誘致を受けて、会の直営という形で次々に山村留学を開設していったよね。しかし事業を継続する中で、財政面、地域・学校との関係においてさまざまな課題が表出してきた。

そんな中で、当時の秋田県合川町からの誘致があり、それらの課題を解決するために、新たに「ノウハウを提供する」という進め方、言い換えれば地域が主体となった教育活動に会が協力する形、つまりは会が創設当時から標榜していた教育運動体としての事業の進め方に大きく舵をきったのが1993年でした。当初は直営方式で活動を拡大していったけれども、地域を含めた自治体全体がもっと本気になって取り組む



青木 厚志

山村留学を広げるにはどうしたらいいか、そして八坂などの直営学園で培ってきた実践ノウハウを元に、中山間地での自然・生活体験活動を全国に広げていこうという意味がこの転換に込められた意図でした。

これを転機に実際全国  
の地方自治体からのアプローチも増えてきて、1998年には中央教育審議会の答申に山村留学が取り上げられ、青少年教育活動の一つとして推進を図るべしとの記載がなされた。これはコソコソ地道に活動を進めてきた会にとって、とても大きな成果とも言えることでした。また、会とは直接関わりのない山村留学に類似するものが現れてくるなかでも、NPO法人全国山村留学協会が研修会を実施し、山村留学の原点についての普及啓発を図るなど、会の趣旨に賛同する自治体のネットワークづくりも進めてきました。

もともと、新しい教育運動として実践活動をスタートさせた育てる会が歩んできた道は、辛苦もあつたけれど、社会的には一定の評価を得るに至っていると言えると思うのだけれどもみんなはどうだろう。今振り返ってみて。

**武市** 自治体の委託を受ける形に変わったことで、会の運営や財政面もかなり安定した印象は受けます。そして自治体からの信頼度も高まったと。合川町に派遣された指導員として地域の中で活動し、その後本部へ赴任してきてそこは感じます。

**秋山** 今も自治体から誘致の話があるなかで、ノウハウもないしやり方もわからない部分が多いから、本音のところでは地域のみなさんや行政は、できれば育てる会直営でやってほしいと思っっているだろうなど少し感じます。ただ、長い目で見ればそれでは地域に根付いた山村留学にはならないでしょうし、徐々に地域のみなさんの気持ちも離れて行ってしまうと思うので、スタートするまで山村留学の本質を丁寧に説明し、会

もソフト面をしつかりバックアップしていくことが大切だと思います。

確か合川町の前にも多くの自治体から話があり、企画調査などもたくさんしたと思いますが、その時の状況はどうだったんですか。

**代表** 北海道、岩手県、山梨県、岡山県などたくさん自治体から誘致の話をもらって企画調査を実施したけど、その頃は全国でさまざまな山村留学が乱立していたし、中には会の理念や山村留学の原点とは違って見えるものもあったから、相手の自治体も会の考え方に賛同はするものの、やっぱり色々な意見があったよね。ただ、当時の直営の場合は会の財政負担も大きかったし、指導者も苦勞が多かった。だから安定した財源を作り、きちっとした山村留学の理念を運動体として広めていくにはどうしたらいいのかと考えて、合川町のような受託方式になったんだよね。

高志理事は直営の新潟県M町の後、当時の長野県大岡村に赴任して受託方式での運営を地域の方々と共に進めて二十年以上になるけれど、実際、その中でどん

な地域の事情や課題とかが見えてきているのかな。

**高志** まず一つは、平成の自治体大合併は大きな転機だったかと思っています。それまでは小さな自治体でも単独で予算を持っていて、地域の学校維持と地域活性化という願いのために首長さんなり地域の人たちが立ち上がって山村留学に取り組み、全国に広がった経緯がありました。市町村合併の中で予算が無くなってしまふと、閉鎖されてしまふ山村留学も増えていったように思います。

私が肌身で感じるのは、まず合併自治体で人口が3万人以下であれば予算を結構自由に運用できるけど、私が赴任している大岡は長野市に合併され、35万人規模の自治体の一地区となったわけですね。そして大合併で周辺の村々をたくさん取り込



青木 高志

んでいるから、何で大岡地区にだけ予算を使っているのかという話になってくるわけです。その中でも大岡で山村留学が以前の通り実施できてるのは、やっぱり地域住民の方々の理解と協力、そして熱意があつたからだと思います。だから現場感覚でいうと、指導者が地域教育コーディネーター的な役割を担う中で、どのようにして地域に山村留学を根付かせるか、センター、地域、学校が一体となって、山村留学を学校外教育、あるいは生涯学習の拠点とし、ひいては都市と農村交流までも見据えた事業を展開する中で、どのように「おらが地域の山村留学」という形に根付かせてきたかということが、一つの視点になるのかと考えています。

そうなると、指導者の資質はもちろんだけど、会の教育運動体としての理念をしっかり理解し、地域の方々や行政担当者の方々の協力を得て、事業展開を図ることが重要だと思います。これはやはり、実践を積み重ねてきたわれわれが、次世代にしっかりとつないでいかねばならないし、方向性を見据えながらのフォローもこれからは大切になってくるだろうと感じます。

**代表** まさに平成の大合併は大きな転機ではあつたね。

合川町の山村留学は、合併によって北秋田市という大きな市に組み込まれる中で、なぜ一つの地域に財政投資をするんだという声が議会で上がって、泣く泣く中止せざるを得なかつた。兵庫県K町も同じようなパターンと言えるかもしれない。そんな中でも本当に今後必要なのは、指導者が地域の体験材を汲み上げながら、子どもたちの体験教育に必要な素材が地域には沢山あるっていう誇りを、地域の人たちに気づいてもらうということだと思う。ある首長さんと話をしていて心に残っている「心の過疎」っていう言葉があつてね。その首長さん曰く、過疎といつてもその地域に住む人々が、自分たちの地域に誇りをもって暮らし続けることが一番大切なのであつて、心が地域から離れることは絶対に避けなければならない。その誇りというものを、山村留学の中でぜひ掘り起こして欲しい、子どもたちにとつて本当に貴重な体験を提供できる場であるということ、地域に住む一人ひとりが感じることができるよう活動を展開してください、と言われたことがある。だから指導者も一人ひとりこの言葉を噛み

しめて、期待に応えていかななくてはならないと思う。

**秋山** 合併について言うと、今指導者を派遣している大田市にしても南砺市・長野市にしても、一旦合併は終わっていると思うので、今の自治体の体制はしばらく続くんだろうと思いますし、昨年から短期活動をスタートさせた福島県南会津町も合併した後の旧館岩村地域をどうするかという話から、山村留学を検討していますよね。

私が入職した30年前は、会が関係している自治体は本当に小規模だったように思います。ほとんどが村という行政単位でしたね。やっぱりフットワークの軽さがありました。ただ今後は、大きな自治体と連携して山村留学を進めていくことも多くなるわけだし、代表の言うようにどうやって地域や自治体に啓発活動を行っていくか、その方法をもっともっと磨かないといけないんだろうなと感じています。

**武市** もう一つ私が合川町で感じたのは、子どもの数が減ってしまってしまったんですね。将来的に子どもが



武市 正幸

いなくなるのではないかっていうのも、山村留学事業の中止につながったように思います。全国的に出生率の低下は続いていますし。ただその辺も見据えて何かこう山村留学に出したいという雰囲気作りとか、その必要性をアピールする活動は積極的に取り組む必要があるように思います。

## 2. 地域教育コーディネーターたる指導者の役割

**高志** 加えて、実際にいま現場で働いている指導者が、その地域の教育コーディネーターであるという意識、そして地域の体験材をどんどん掘り起こしていく意識が大切だと思いますね。

それから、例えば自分の山村留学指導者としてのスキルがどのくらいあるのか、スキルの見える化ってい

うのかな、研修も然りなんですが、向上心的なものを醸成する研修制度、そこはわれわれが旗振りをしながら積極的に指導者を育てていくという意識が必要だと感じますね。地域教育コーディネーターとしての自覚につながるような、自分のスキルに見える化ができるようなシステムがあるといいのかなという気がしています。

**代表** 指導者は日々目の前の子どもたちへの対応を一所懸命やってくれているよね。その一方で高志理事が言うようなスキルと意識の獲得を、次の世代へのアプローチの中でしっかりと考えないといけないということだね。

**高志** 代表がこの前言った、指導者を育てる専門学校の話はとてもいいアイデアだなと感じましたね。山村留学指導者、つまり地域の教育コーディネーター的なものを育てていくようなシステムがあると、みんなやる気も出てくるでしょうし。

**代表** 指導者養成というか、地域教育コーディネーター

を輩出できるような専門学校の必要性というのはかなり前から感じるところなんだよね。その昔、会で高校を設立する話もあったけど、それよりも会のノウハウを基にした、一次産業や自然観察、伝承文化、食文化などのスキルのほか、地方行財政論、省庁の仕組み、子どもたちへの心のアプローチなども知識として修得する中で、地域教育コーディネーターとしての能力と専門性を持った人材を輩出できるような専門機関をつくれば、体験教育を通した新たな地域活性化につながっていくと思うし、会の運動体としての理念にも合致しているように思っています。

この後話が出ると思うけど、長野県庁が設立した信州自然留学推進協議会の動きにのって、県内の大学あたりでそういう専修コースを作るのもいいんじゃないかって。そんな提言をしても面白いよね。

やっぱりこの仕事にはプロフェッショナルな人材が必要不可欠。子どものケアから地方行財政のこと、体験材のことなど修得すべきものが多いわけで、それを日々子どもと接している中で指導者たちに根付かせていくのはとても力のいることだね。だから現場に行

く前に、ある一定の基礎知識的なものを身につける機会の必要性があると思うんだよね。

### 3. 地域や行政の理解の大切さ

**秋山** 私から一ついいですか。いま八坂美麻以外は自治体との連携で学園運営をしているところなんです。つまり、センターに会の指導者と自治体職員の方が机を並べて山村留学事業の推進にあたっています。そうになると、指導者養成も大切ですが、一方でその自治体の方の研修みたいなものも大事だと思うんです。担当の方は数年で変わることも多いし、意識の違いってとても影響が大きいと思うんです。

**高志** 以前は、全国山村留学協会の研修会に、自治体の担当職員がみんな



秋山 雅光

来ていましたよね。それが予算削減で出張ができない状況になってしまいました。ただ、今秋山くんが言ったような研修は必要だと思うし、なおかつ行政の教育長なり首長さん、そういう方々にまず真つ先に理解してもらうことが大事なと思いますね。

**代表** 長年やってきて、行政の指向というか、その理解と考えが鍵になってくるなという実感はあるね。行政サイドの思いというのかな、基本的な地域づくりの考え方、地域住民や地域の子どもたち、学校も含めてその存在を、山村留学事業を活用してどのように高めていくのか、そんなビジョンを持っている行政マンがいれば、その地域は輝いてくると思うんだよね。そんな行政マンとは、やっぱり仕事をしていても楽しいしね。いずれにしても、自治体職員へのアプローチも当然欠かさずやっていく必要はあるね。

**秋山** 武市さんが指導者だった合川町は、ある意味小規模な自治体から、合併によって大きな市の一地域になったわけですけど、今代表が言った行政や担当者の

理解みたいなのは、変化がありましたか？

**武市** 合川の場合は、スタート時はそもそも首長の発案だったので、行政担当も理解しようと努力してくれ、たし非常に協力的でした。担当者自身がこの事業を楽しんでいったというか。

これは余談かもしれないけど、合併時に合川町を吸収する側の自治体に大きな総合病院を建設する話を持ち上がり、有名な病院の先生が市長になられて。そして、さらにもう予算配分は病院に流れてしまっただけで、山村留学は真っ先に切られるリストにあがってしまった。地域の人はだいたい抵抗したし、山村留学に対する熱量はあったんだけど、やっぱり首長の意向と行政方針によってかなり左右されてしまうものなんだと感じました。

**代表** 首長なり行政マンはもちろん大事だけど、本当にこういう事業を推進していくための核になる人は誰かなど。そうなる地域の中で事業を牽引していく、ブルドーザー的な役割を持つ人がキーパーソンとして必要だと思うんだよね。

過去に開設した新潟県M町、今この事業を受託して指導者を派遣している島根県大田市、富山県南砺市でも、必ずその役割を担う人が地域にいたよね。そういう人は、多少行政の方針が変わっても、住民の力としてこの事業を推し進めてくれる。だから、そういう人たちを発掘して、しっかりとコンタクトを取り続けるっていうことが大事なんだろうな。

**高志** 私も山村留学はそういう人がいないと始まらない側面があると思いますね。ただ、地域の総意というか行政の支援というか、ただブルドーザー的な人が一人頑張っても、やっぱり山村留学はうまく続いていかない。だから大岡では山村留学推進協議会を作って、地域の全区長に入ってもらって山村留学の理念をしっかりと理解してもらおう機会を作っています。山村留学はもう地域には絶対必要なものだ、学校の存続は地域の存続につながるということも含めてね。そういう集団づくりは、長野市のように自治体が大きくなければなるほど、行政も動きたくても動けない状況になるから、地域住民の思いが行政に反映されるようにするた



めに必要だと感じますね。

**代表** そういう意味ではブルドーザー的な人は、山村留学を立ち上げる時の創設期には必要だけど、事業を継続していくにはその先に広がりを作っていくかなきゃいけないっていうことなんだね。それは今すすめている南会津町なんかにも参考になるよね。

**秋山** そうですね。南会津町も推進協議会の設立に向けて動いてはいますが、元々行政主導で始まったことなので、地域への浸透はまだこれからかもしれません。ただ、短期山村留学を実施する中でホームステイを取り入れたりしているので、地域の中で応援してこういう機運が高まっているのを感じます。だから時間をかけて誰かブルドーザー的な人を見つけ、長期留学のスタートに向けていけたらいいなと思っています。

**高志** 推進協議会も一つの方法だけど、地域に浸透させていくもう一つの具体策としては、地域の子どもをセンターに招いて一緒に活動するとか、地域にいろん

なものが還元されていくような姿、そういうセンターのありようを指導者が考えて展開していくことが大事だと思います。地元の子どもたちに還元されないと、ただ都会から子どもがやってきて何かやってるね、で終わってしまいますから。だから指導者には地域に還元する、そういう感覚が必要かと思えますね。

#### 4. 地域のための山村留学

**代表** 地域の子どもに還元するというのは大きなキーワードだね。八坂でも公民館や教育委員会と連携して、地元の児童向けに通学合宿など色々な活動を展開している。山村留学の教育力を地域の子どもにもしっかり還元するということは大切だね。

地域への貢献については、何も子どもへの還元だけではなく、地域活性化という面でも注力が必要だと思う。なぜならやっぱり地域は高齢化してくるし必然的に地域力も残念ながら落ちてきてしまう。長く続けられれば、山村留学に対しての熱意も下がってしまうかもしれない。だからこそ、子ども達への活動提供を通して、

地域に貢献する努力を日々積み重ねていくことが大事なんだと思う。

**高志** 実際、これだけ地域が高齢化してくると、ホームステイ先もなかなか見つからない状況になるだろうし、さらには限界集落じゃないけど将来展望が見えてこないことにもなってしまう。大岡ではそういう危機意識が、今の取り組みにつながっていると思います。

今大岡では、長野市内の未就学児から2年生までを対象に年6回の自然体験活動を実施したり、長野市中心部の保育園児を年間8回大岡に招いて、お米作りや宿泊保育をやったりしています。それはNPO法人を立ち上げて地域住民が主体となって実施しているので、参加者はみんな喜んでくれるし、それを見て地域住民も、大岡でこんな体験が提供できるんだとみんな一生懸命なんです。さらにはこの参加者の中から親子留学が3組来ていて、大岡小学校の地元児童としてカウントされている。もちろん親子留学の子たちは単なる移住ではなく、NPOやセンターの活動にも参加する、こういう流れが大岡ではできてきています。つ

まり、大岡には未就学児から小学生中学生高校生までの途切れない体験項目があって、そういう地域であることをこれから発信し、ブランディングしていくことをNPOのみなさんと考えて活動しているんですね。こんな動きが、例えば八坂や美麻でも大町市内や安曇野などの人たちとできていくと、その先の未来が見えてくる気はしますね。

**代表** とても新しく先駆的な動きだね。地域から支持を得るための一つの有効な取り組みだし、実際に成果が出ているのは素晴らしいね。あとは会として旗振り役を上手に担って、地域の人たちがこの企画から運営まで全部に携わっていくことが大事なポイントになると思うよ。

## 5. 親子留学をどうとらえるか

**秋山** 今話の出た親子留学ですが、実は全国山村留学協会の調査によると、最近では親子留學生が人数的には一番多いんです。加えて協会には、親子留学をスター

トさせたいが相談にのってほしいという問い合わせがチラホラ来ます。私たちとしては親子留学の位置づけはとても難しいですが、全国的には親子留学も山村留学の一つとして認知されています。ただ、大岡の親子留学のように学校外に「学びの場がある」場合と、学校教育主体でどちらかというに移住に近いようなものが区別がされていないというか。そのあたりみなさんどうお考えでしょうか。

**武市** 確かに大岡は本当の意味での親子留学だと感じています。だから親子留学もその中身で分類していいばいいんじゃないかと少し前から感じていました。

これからは子どもだけじゃなくて親の考え方、感覚の多様性にも応えていけるような団体になっていかないといけないのかなと感じています。親子留学ではないですが、例えば、くらぶち英語村はまさに親と子どもとのニーズに応えてると思うわけです。確かに会が実践してきた従来の山村留学とは少し違った面もあるけど、希望者が大勢いるということを考えて、会としても、この先何を大事にしつつ新たな方法論を生み出すのか、その一つのヒントになると感じます。

すのか、その一つのヒントになると感じます。

**高志** 親子留学には本当にいろんなものがあってね。小さな自治体であればあるほど、例えば家賃は無料とか、色々な特典を与えていてね。それによって親子留学としてのプライオリティが高くなって人が集まりやすくなる。当然だよ。でも大岡にはそういうものが一つもないんです。だから中身をしっかりとブランディングして勝負しよう、そうやって人を集めるしかないだろうと皆が話し合って活動を展開している状況があるんです。そういう中身の特色を効率的に発信できるプラットフォームがあるといいなと感じます。

もう一つ大岡の親子留学の特徴は、実際今来ている子がそうなのですが、親子留学を3年やったら、今度はセンターの方に山村留学に出したいという、つまり山村留学までのプレ体験で親子移住をしている方もいる。そういうつながりも他にはない特徴だとは思いますが。

**代表** 親子留学がこれだけ広まってくると、あとは武

市くんなり高志理事が言ったように、「留学」という言葉の意味合いをしっかりとさせることが必要だね。この間、高志理事が「体験型親子移住制度」と言っていた、あれは的を射ていい言葉だと思ったんだけど、やっぱり地域に教育に関するコーディネーターがいて、そこに親子で来て何か学びの場がきちっと学校教育外に設定されてるかが、単なる移住との大きな分岐点だね。

今はオンラインで仕事ができる人も増えているし、地方志向も広がっている。今後そういう親のニーズが膨らんでいく可能性を考えると、親子留学という形態は否定するものでもないのかもしれないね。また少子高齢化する地域にとっても、体験を重視した大岡のような親子留学は、とても意味のあるものになる気がする。ただ、親子留学という言葉で一括りにするのではなく、体験をキーワードに中身的な分類を図っていく必要は絶対あるよね。

やはり山村留学は、親元を離れた子どもたちを対象にするのが本来であり、親子で留学という場合はそこに学びの場があるかどうかが重要なポイントだね。

## 6. 途切れない体験の場が必要

**高志** 育てる会では、短期長期あわせて未就学児から小学校中学校高校大学まで、途切れない体験の場を提供しているということが強みで、これは大事なことだと思っています。長野県には信州山保育があるけど、最近では全国的にも認定制度が広がって自然保育が非常に広がりを見せていますよね。ただ、よくよく考えると、育てる会では幼児低学年班（年長から参加可）をもう40年くらい前から実施してるよね？

**代表** やってるやってる。

**秋山** 当初は幼児と父母という名称の活動班があったし、今は未就学児も対象にしたファミリー班というものもありますね。

**高志** そのあたりは非常に先駆的だったんですね。あの当時は、未就学児を集めて体験活動を実施している団体なんてほとんどなかったと思うんです。それをも

う40年も前からやってきた。そして、その子たちが小学校から中学校、高校と継続して参加できる場を提供し続けてきたことは、大きな一つの実績じゃないかなと思うんです。さらには大学生になるとボランティアとして帰ってくる。つまり、未就学児から大学生までの途切れない体験の場が育てる会にはありますよ、ということをぜひ謳っていきなと思うんです。

**代表** そこに加えて自分が家族を持てばその子息が参加するという、体験の連鎖が次の世代に引き継がれていく。こういう循環的な体験プログラムや場を用意していることは、一つの大きな強みだね。生涯学習の観点からしてもこれはとても大事だし、その強みを指導者たちもしっかりと理解をして、各地域で事業を進めていく必要性があるね。例えば大田市とか南砺市でもファミリー班などを企画してみれば参加者が結構集まると思うね。

## 7. 自己評価の在り方

**武市** 少し話題を変えて、人事担当の立場から一ついいですか。私は今、職員たちに共通理解みたいなものを伝えていく具体的な場面を、早く設定した方がいいと感じています。最近少し支部ごとに違った価値観ができていて。今は主任が集まる総務会で共通認識をはかり、そのあと各職員に伝える方法が主ですが、なかなか共通認識に至ってないと感じるんですね。

**代表** コロナ禍で集まれないのもあるけど、それは大切なことだね。そういう機会に高志理事から、具体例も含めて今ずっと整理して話してくれたものを、みんなに伝えられるといいかなと思う。大岡のNPOの動きや会の指導者はどういう場で何を求められている、どういう方向性で動いていくのがいいのかってね。留学生指導以外の業務の話も出てくるわけだから、これには働き方も関わってはくるけど、まずは指導者たちが理解を深めて、熱意を持ってやっていけるようなテーブルを作るのは私も大賛成だね。

**高志** 大事なものは育てる会全体の共通した現場指導者のスキルアップを図ることかな。それには私が最初に言ったスキルの見える化というのを各指導者の中でするといいんじゃないかと思うんです。例えば、野外活動分野のスキルだとか、地域に対してのコーディネート的なスキルだとか、そういうものが一つずつ明文化されて、そこを自分がクリアできてるかどうか自己判断ができるようなものが示されてると、とても具体化されるし、自分が今何を学ばいいのか、どういう体験をしていけばいいのかという、やる気にもつながるんじゃないかな。

**代表** なるほどね。チェックシートを作る感じ？

**高志** そう。もしいずれ専門学校的なものを作るなら、こういうのはカリキュラムにも生かせるし必要だと思うんだよね。色々なものを項目立てて、それをチェックしていく中で自分がどこまでできてるのか、到達してるのか、そんなのがあるといいなと思います。

**代表** 確かにそれで資質が高まっていけば、専門学校ができた時に、各指導者が講師に立つというようなことにもつながっていくし、夢というかやりがいにもつながるかもしれないね。

**武市** 内定者研修などで感じるのは、自分自身の体験が少ない若者が多くなっているんじゃないかということです。留学生にやってももらう自然体験歴チェックがありますよね。「田んぼに稲を植えたことがありますか」などの設問に対して、はい・いいえをチェックする。実は内定者でもそういった体験歴は少なくなっているのかなど。逆に言えば私たちはあれを一つの指標にして子どもたちに活動指導していくわけですから、高志理事が提案してくれたスキルチェックは、すぐにも取り組んで、何が足りないか具体的に考えていく必要があると思いました。

加えて、実は他者評価も少ないような気がしているんですよね。評価って程でもないですが、ある学園でスタッフと勤務内容などについて話をしてきたら感謝されたんです。考えてみれば公平でフラットな場面で

職員を評価していく機会が少なかったような気がするんです。だから自己評価も大切だし何か他者評価的なものもやっていく必要があるのかなと感じました。

**高志** 私は自分が所属している学園評価というものを、それぞれしてみるのも面白いかなと思いますね。地域に密着してるかとか、いろんな項目があつて、それを各学園のそれぞれの指導者が評価してみると。それを元にみんなで話し合いをすることが大事で、学園の方向性とか課題も見えてくる気がしますね。

**代表** なるほどね。やつぱり具体的に何かチェックシートを作っていく必要があるね。自学園の評価チェックもあつていいだろうし。その辺具体的な項目とか、高志理事を中心に作り始めてみよう。

## 8. O B 会の在り方

**代表** 次は、今度八坂の山村留学修園生が音頭をとつて、まだどういう組織になるかはわからないけど、O B

会というテーブルができるので、それについて話してみようか。これはある意味、会が進めてきた体験活動の集大成なんだよね。実際に一年の山村留学を体験した子は実数で2,000人強いし、これに夏冬の短期参加者やボランティアも加えれば何万人っていう数字になると思う。運動体として取り組みを広げていったスタートの合川町を開設してから、今年で何年ぐらい経つ？

**秋山** 私が入職した年かその前年に武市さんが赴任しているので、30年くらいは経つと思いますよ。

**代表** つまり、会の山村留学47年の歴史の中で、30年近くは直営派遣ひつくるめていくつもの山村留学が存在してきたってことだよな。そのすべてが基本的には会の理念に基づいたメソッドで運営してきたわけだから、どの留学地で修園したかの区別はなく、1年間のプログラムを体験した修園生たちはみんな、会のおかげがえのない財産なんだよね。だから、私は全学園の修園生が集う会になってほしいと願っています。

会創設50周年記念の時に作成して、それ以降全留學地で、修園する子に配っているピンバッチがあるよね。あれはある保護者から、自分の存在やプライドをしっかりと胸元に掲げるのは本当に大事なことだよと聞き、1年間の体験をしたという誇りや帰属意識的なものを持ち続けてほしいという願いから作ったんだよね。

**高志** OB会の話が出た当初の中心メンバーの考えは、自分の留學地では縦のつながりが弱いから、世代を超えてつながるテーブルになればって話だったけど、他所の修園生とも協議を重ねる中で、最終的には育てる会に関わった人たちみんなが集う会にしようってなつたみたいだね。だから短期山村留學で育つた子たちにも声掛けをしているみたいだし。

**代表** まだ近い人だけの集まりだとは思っただけど、これが全国に広がっていった一つのテーブルに集まると非常に楽しみだし、一本線ができることで次の世代の人たちがまたやり甲斐を感じてくれればいいね。とにかく何かあった時の応援団になることは間違いない

からね。

武市くんや秋山くんは、私が言ったような構想を基にして何か期待するものってあるかな。

**武市** やっぱり、必ず会を今後も応援し続けてくれる存在になると思うので、そういう意味でもOB会の発足は本当に大賛成です。

**秋山** 私は短期参加者やボランティアなどとの関わりも強いので、育てる会を支えているという意味で、そういう人も入った大きなつながりになってくれればと期待しています。それがめぐり巡ってボランティアの参加意欲につながってくれると向いいんですけどね。やっぱり山村留學や短期の経験者がいてくれると、中身がわかっていけるから本当に助かりますし。

ただ、OB会の「OB」が何を指すのかってことは、もう少し話し合う必要があるかなと。会の事業に携わってくれた人全部を含めるのかとか。

**代表** 確かにそこは整理しないとイケないね。OB会



## 山村留学 OB・OG 交流会

去る1月29日、八坂美麻学園を修園した方々が中心となり、過去育てる会が運営していた山村留学園の修園者の方々にも SNS などで呼びかけを行い、記念すべき第1回 OB・OG 交流会が開催されました。山村留学開設以来47年、今まで年代と学園の枠を越えた修園生が集まる機会は一度もなく、初の試みではありましたが、有志の方々を中心に約40名の方が参加しました。

当日は一人ひとりが自己紹介を行い、留学時に得た体験がどのように人生の中で生かされているかなどを思い思いに語り合いました。参加者の中には八坂学園の1期生もいらっしやり、幅広い年代の方々が共通体験をもとに話に花を咲かせ、とても和やかな時間となりました。



山村留学八坂学園 1期生 佐藤泉さん

今後は更にこの輪を広げ、年1回この交流会を開催することを皆で確認しました。会としても、OB、OGの皆さんが歩んでいる人生そのものが、山村留学という教育活動のエビデンスであると確信し、この会の開催を今後もサポートしていきたいと考えています。

のカテゴリズというか線引きについて。私はやっぱり1年間の山村留学を体験したというのは、短期的なものとは少しくオリテイが違うって気がするんだよね。だから、もっと外郭に大きな集まりがあって、その中に山村留学修園生や短期経験者、ボランティアが集うイメージなのかなあ。

**高志** 話し合いを重ねる中で、山村留学だけじゃないぞ、短期のリーダーや参加者も関わってる、じゃあ育てる会を応援するっていう意味で、みんな枠に入れていこう、というような話になったみたいだよ。私が以前赴任していたM町なんかは、山村留学生と短期参加者・ボランティアをあまり線引きせず集ってきてたから、そういう意見も出たんだと思う。

全国に散らばっている育てる会と関わった人って、私は一つの育てる会支部だと思ってるんですね。何かしら山村留学や短期活動などをPRしてくれると思うしね。そこを大切にしていけば、昔ながらの口コミで留學生が集まったり、ボランティアが増えていったりと、どんどん広がると思うんですね。他にも将来的に

は自分が行った自治体にふるさと納税するとか、色んな方向性が出てくるといいなあと思いますね。

**代表** そう考えると、全ての関わった人たちが大きな輪になって、アンテナショップのように全国に広がるという位置づけになっていけばとても素晴らしいことだし、縦横のつながりも深まれば、メンバーにとってもより意味のある集まりになるね。その辺の組織づくりについては、声掛けをしてくれた中心メンバーたちの考えもあると思うから、これからじっくり話し合っ  
ていきたいところだね。

### 9. 信州自然留学（山村留学）推進協議会の発足

**代表** 去る1月13日に、長野県庁主導の信州自然留学（山村留学）推進協議会が発足したよね。都道府県レベルで山村留学を推進し、実際に組織化していくのは我が国で初めてのことだけど、全国で山村留学が一番多い都道府県はどこになるのかな。

**秋山** 実施校数、留学生数ともに鹿児島県が一番だと思えます。鹿児島県は小さい離島が多いんですけど、実施校が多いし、中には20名以上の留学生を集めている地域もあるので、合計すると多くなりますね。留学生数だけでいうと、その次が長野県、北海道、山梨県、群馬県って感じでしょうか。鹿児島県や北海道では昔から県のホームページに実施校一覧を掲載してPRはしていましたが、今回の長野県のように知事が会長になって推進協議会を発足するっていうのは、初めてのことだと思えます。

**代表** 運動体として事業を進めてきた会の趣旨からすると、決して悪いことではないよね。ただ県内の山村留学も内容や形態は千差万別だから、推進協議会の中で会がどんな役割を果たしていくべきなのか。

**高志** まだ発足した段階だから、知事や県庁部局の理解がより深く進むのもこれからだろうし、少し時間をかけてやっていく必要があると思いますね。まずは代表が副会長という立場なので、早めに知事に会いに

行つて、山村留学の根幹の部分をもう一度理解をしてもらうことが必要だと会議に出席して思いました。島根県庁が積極的に支援して始まった「しまね留学」が、今は「地域みらい留学」という名称で他県にもどんどん広がっているよね。これはすごくいいことだと思う。だから、ゆくゆくは今回長野県で始まった協議会のようなものが他県にも広がって、それぞれの道府県が山村留学を支援する流れになるといいなあと感じています。

**秋山** 親子留学をどう捉えていくかが大切だと思います。私たちは信州自然留学という大きなカテゴリーの中に、①子どものみ②親子一絡みみたいな二つに分類をしたらいんじゃないかって話し合つたと思うんですが、会議に参加していた親子留学の中にもそれぞれに違いがあると担当部局は言うんです。もつとも山村留学も全寮やホームステイなど中身は違うんですけど。いずれにしても、今度の4月には県としてのポータルサイトがスタートするわけなので、もう一度整理して、みなさんの理解促進を図りたいところですね。

**武市** ポータルサイトを見る側の立場とすると、まずは青少年対象なのか親子対象なのかポイントになると思うので、その点を入り口のところからわかりやすく作ってもらえるといいのかなと思いました。その次に親子留学一つをとってみても、いろんな違いがあるわけなので、入り口の先でも分けていく必要があると思います。

**代表** 私も最初の入り口はそれで分ける必要があると思う。その先に、親元を離れたものには全寮制やホームステイ式、育てる会の学園方式、つまり併用式がありますよという紹介がいいかなと。また親子共々の場合も、学校教育が主体のものとか、地域に教育コーディネーター的な人材がいて学校外でも地域の中でさまざまな体験プログラムがあるものとか、分類して発信する必要があるだろうね。そうしないと何でもかんでも十把一絡げになっちゃうし、留学する側と受け入れ側のミスマッチにもつながるから、きちんとした情報提供をしていかないと混乱の元だね。

## 信州自然留学(山村留学)推進協議会

去る1月13日、長野市内にて長野県庁主催による標記推進協議会の設立総会が開催されました。この取り組みは、信州の豊かな自然を生かした学びの場としての山村留学を推進するため、県内の実施団体や関係部局が集い、相互連携や情報発信を強化していくもので、具体的にはポータルサイトの開設等を通して、全国にその魅力を発信していくことが狙いです。

現在では全国各地に広がった山村留学ですが、都道府県が主導してこれを支援する試みは全国初となります。育てる会が長野県旧八坂村(現大町市)に山村留学を創設してから47年。私たちの取り組みが評価され、新たなステージへと進むことに期待感が増しています。

総会当日は会長の阿部守一知事も出席し、副会長に就任した当会の青木厚志代表理事の記念講演や出席者による活発な意見交換が行われました。今後は、山村留学の原点と基本理念の浸透を図るため、当会としてもこれに尽力していく所存です。



青木代表の講演

**高志** 大岡に限って言うと、県が山村留学を本気になって応援し始めたという動きが新聞に掲載されたりTVニュースで報じられたことは、地域にとっても自信を与えてくれましたね。じゃあホームステイの受け入れをやってみようかとか、大岡地区の人たちは喜んで。これからも自信を持っていこう、自分たちがやってきたことは間違いなかった、ってね。他にも県の動きに押されて、長野市の意識もこの一年間で少し変わってきたところもあるから、それは大きいと思います。これはどこの地域でも同じじゃないかな。

**代表** なるほどね。地域にとっても後押ししてくれる動きではあるわけだね。山村留学の歴史を振り返ると、会が創設したあとに、全国にいろんな形態の山村留学がたくさん増えてきた中で、われわれも運動体としての理念をもとに事業実践してきたよね。それが青少年体験教育の場の広がりとともに地域活性化にもつながっているし、今回のような県という大きな組織を動かす一つの起爆剤になったとも言えると思うんだよね。いざこれにしてもこれは非常に良い動きだから、私も副会長

を仰せつかったわけだし、最善の方向に行くよう県に協力しながら今後の推移を見守っていきたいと思うね。

## 10・子どもや保護者の多様化

**代表** 子どもの多様化、保護者のニーズの多様化にどう対応していくかということについて話してみようか。

**高志** 正直もう多様性っていう言葉は聞き飽きちゃってる気もするけれど、われわれとしては会の理念と方向性をしっかり発信して、そこに集う人たちをしっかりと育てていく、その人たちに体験の場を提供することが大事だと思うんですね。そこで絶対無理はしちゃいけない。社会の変化に合わせていったり、対応策を練るのも大事なんだけど、やっぱり理念を元に集う人を開拓していくということ、そこは絶対忘れちゃいけないと思うね。本質、土台というものをしっかりと持って、それをしっかりと周りにPRする中でそこに集う人たちを増やしていくと。そういう動きは大切だと常々感じます。

**代表** 確かにさまざまな子どもや保護者がいる中で、実際には会の理念に基づいた一定の基準線のようなものを各指導者が持って指導に当たっている。それはそれとして大事なものだけど、本質的なところは高志理事が言ったような、理念をきちっと共有できる子どもや保護者に集ってもらおうということだよ。それが運動体としての理念の広がりにもつながるわけだし。

**秋山** 実はここ数ヶ月、フリースクールや不登校児専門の雑誌などから、全国山村留学協会への取材依頼が3社もあつたんです。全国の不登校児童生徒数が過去最多になったというニュースを受けてのことだと思えます。そういう子どもを排除するわけでは決してないんですが、実際にはホームステイなどでは受け入れが難しい場合もあるので、そこは丁寧に説明していません。

ただ、われわれがどう考えるかは別にして、こういう波はあるので、その中から会の考えに合致する人を吸い上げてくことも大事でしょうし、われわれの方でも何か間口を広げるような方策があるんだったら、本

質・土台を曲げない範囲の中で、今後の展開として取り入れていきたいなと思うんです。

**高志** 会として学校を持つていけば大分カバーできると思うけど、地域の公立学校に子どもを送り出す、一般家庭にホームステイをお願いするという今のシステムの中では、やはり線引きをしてかないといけないところはどうしてもあるよね。個人に焦点を当てすぎて他の子の体験の場を奪ってはいけないし、集団生活ができないような状況になってもいけないから。

ただ、子どもにはみんなデコポコ（凸凹）があると思うし、そのデコの部分を伸ばすのが山村留学なのですね。いろんな子を受け入れて、そのデコの部分を思いつきり伸ばしてあげて、ポトムアップが図れればいいなという考えは絶対持つてなきゃいけないと思うんですね。指導者として大事なものは、全体としてのボーダーラインをあまり狭めずどこにおくか、自分のスキルを上げながら幅をどんどん広げていくという意識を持つている必要があると思いますね。

**代表** 以前高志理事が、子ども社会の多様性を体験させるには色々な子がいた方がいいんだよ、みたいなことを言ってくれたよね。私もこれには非常に賛意を示すところなんだ。指導者の力量に左右される部分が多いとは思うけど、指導者は許容量を少し広く構えておかないといけない。学校に行けてないからダメだとかそういうことではなく、間口を広く持つて、例えば短期への参加を促すとか、保護者とじっくり面談を重ねるとか。子どもの意欲を汲んであげた上で、意欲的な子どもであるならば受け入れてあげたい、体験の場を提供してあげたいと私は思うんだよね。さまざまな課題があるだろうから、指導者たちとじっくり考えてみたいね。

## 11. これからの10年

**代表** では最後に、これからの10年、育てる会はどういう方向に進むべきなのか、みんなの意見を聞きたいと思う。

**高志** やっぱり育てる会の基本理念というものをしっかりと全職員が持つということ、それを教育運動につながるために周りに普及啓発していくということ、それがまず基本となると感じます。

**武市** これまでの50数年、世の中がどういう波であろうと、育てる会は結局あまりブレずに、同じ位置をキープしながらやってこれたと思うんですね。ということはこの先の10年も基本的には生涯学習、青少年教育の運動体として、理念をしっかりと守りつつやっていくということなんだと思います。

ただ、その草創期あるいは前中期に携わってきた私たちがそろそろいなくなる場面が近づいてきている中で、それを継承していく次の世代の人たちを育てることが喫緊の課題じゃないかと私は感じています。それができれば、これからの10年どころか、もしかしたら50年先もキープしていけると感じています。

**秋山** まずはこの先2年ぐらいは、色々な事業をコロナ禍前の水準に戻していくことが大切だと思っていま

す。ただ戻すのではなく、コロナ禍を経て運営の仕方などで実になったこともあるので、それを活かしながら、特に短期活動などを少しずつ戻していく。

その先は、やっぱり全国的に少子高齢化や過疎化はなかなか止まらないと思うので、今後も山村留学の導入を考える自治体が増えてくるんじゃないかと予想しています。もちろん自治体が財政的に厳しいという流れはずっと続くと思いますけど、どこかの行政の方が「地域に学校がなくなれば地域もなくなる」と言っていました。もはやお金の問題云々じゃなくて、山村留学が注目を浴びる時代がこの後も来ると思っていますね。そういうところに運動体としてアプローチをかけ、全国に広げていくことが大事だと思っています。と同時に根っこである八坂美麻学園の充実も大事かと。

**代表** まずは職員が共通理念を共有して、それぞれの現場でしっかりと実践しながら成果を積み上げていくことが大切だろうね。将来的に山村留学のニーズが一層増えていく可能性があるのであれば、そういう流れの中で、今までの50数年のノウハウを基にしながら、

次世代を担う人材をしっかりと養成していくことが大事だよ。人を作っていくということ、それは地域を作っていくことにもつながっていくわけで、そこでのキーパーソンとしての指導者の役割、育てる会の役割というのしっかりと認識して、これから10年間進んでいくということが必要だね。会の理事、評議員、監事には多彩な先生方が列席してくれているので、これからはいろいろな指導助言を得て、歩みを進めていきたいね。色々な話が出ましたが、今回の座談会はここで閉会したいと思います。これからも、現場の職員の声に耳を傾けながら事業を進めていきましょう。

